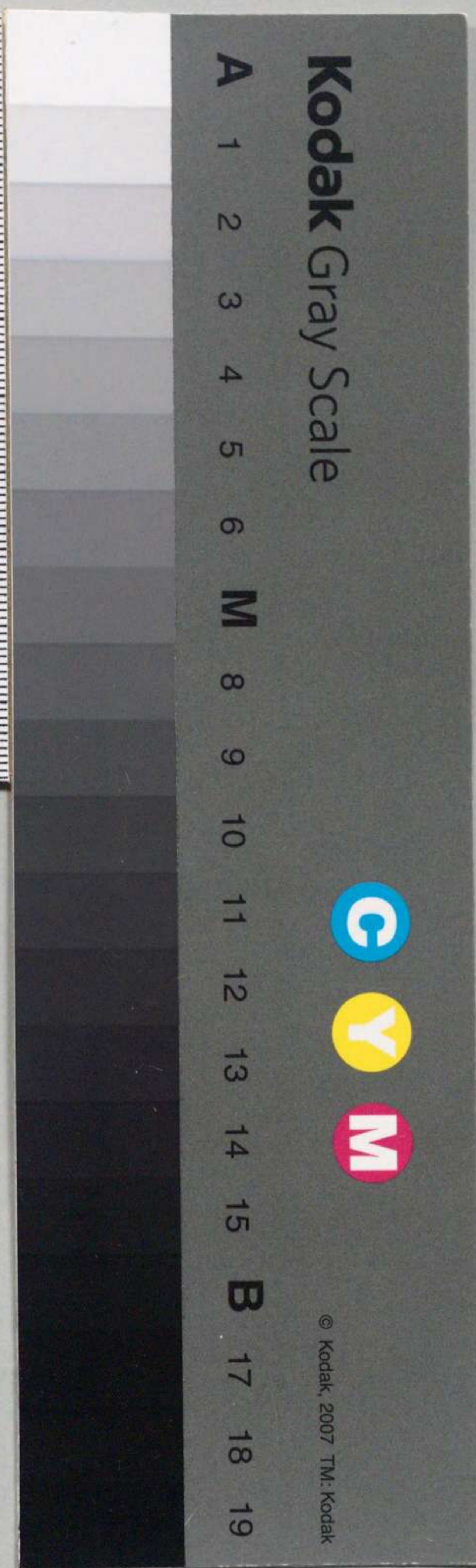


寛永諸家譜

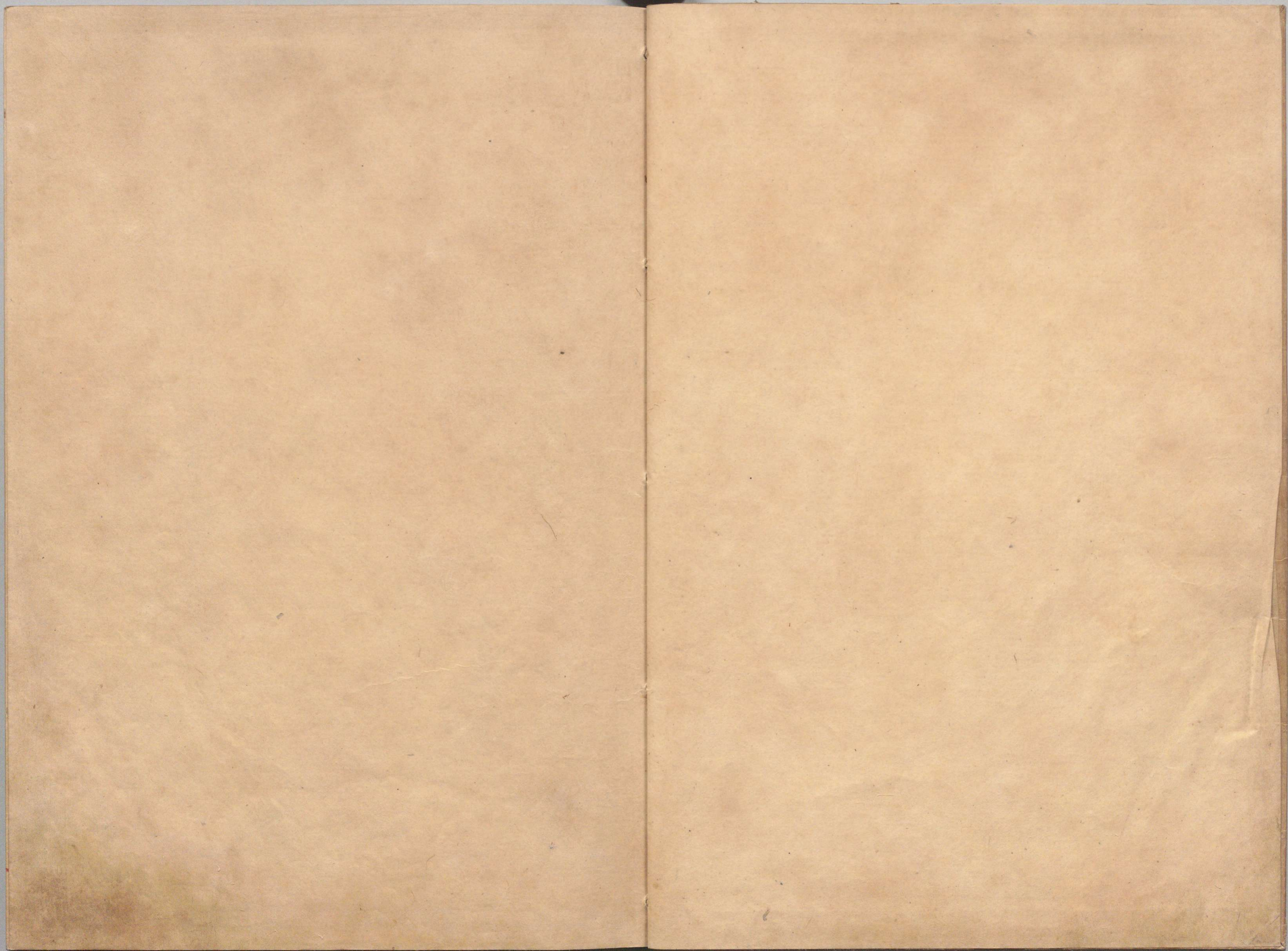
支流 藤原氏 癸廿五冊之内 廿三

136

内閣文庫	
番號	和 20199
冊數	186 (136)
函號	樹 76 1



糊等で貼り付けられている部分がめくれない箇所あり



澤 派 鴻 寬

館 勝 乾 神

寬永諸家系圖傳

藤原氏

支流

寬

癸二十三

淺草文庫

某

清丸唐守尉

長親之

生國冬河

信忠之了了ふま

重忠ちげん

尚書しやうしやう

生國同前なまくにらまへ

清康君きよやすきみ

廣忠卿ひろたかきみ

つふふらりその

のち

東照大指現とうしやうだいしゆげん了りやうは之これをましらるるにして教

度ど太ちやう首しゆをつつくに

廣忠卿ひろたかきみ冬ふゆ列りよく忌い崎さきりしはは城しろの時とき

松平三まつだいらさんたた忠ちゆう謀ぼう叛はんをらははりし徳とく士し志し

とと月つきもも海うみももののもも又またおおほほくくししてて謀ぼう中ちゆう

阮えんああややううののんんとといいふふににとといいふふ重ちゆう忠ちゆう

軍ぐん中ちゆうににももせせりりてて三さんたた忠ちゆうをを討うちちしし

けけせせくくしし廣ひろ忠たか卿きみ勝かち利りをを均ひらななるる感かん状じやう

をを移うつふふらられれととばばりりいいふふ

今いま度ど三さんたた忠ちゆうをを生な害がいしし後ご忠ちゆう首しゆをを以もてて

けけ忠ちゆう於お子こ、こ孫まごにに忘わするるをを教しへへししてて為なすす

紆こ患わづらひ万まん近ちかしし知し出い産うぶ産うぶのの治ちをを伊い波はのの於おけけ

未いま代ごころ不ふ可か有ありりおお遠とほくく上かみにに以もてて名な別べつしし日ひ記き

お重しや

天文十六年

十月廿日

廣忠御判

寛平三のち

永祿六年三列女願寺門流黨と錯
て整起し年忠波家旨よりと之
少も彼し属せびして忠旨を
しげし

天文十六年七十七歳少して病死

法名西道

正重

助右史

生國冬河

清康君

廣忠郷よつふまうり

ろけち

大指現しはくしてしり家

正長

助右史

生國同前

大指現よつとそまうりのち 作あつたよ

よりて水戸中納言頼房郷よりふ

寛永三年五十七歳少して死す

重成まか

平十郎 勘右衛門 生國同前

大指現より流るるそまうりふ

永禄三年尾列石湫合戦の時ま成

鏖下此高名と坊よりこれと記大上まか疵

を即りし海

大指現より流るる内感状を移ふりし

とばりいけ

と夜石湫よとひとそまうりふ

水戸中納言頼房郷よりふ

此のふと

八月朔日 元康御判

寛平十郎よ

同六年本願寺門流蜂起の時

元成父重忠と行形と忠節を
つとむるは後由旗を以てし
天正十七年五十二歳にして死す

元成

勅右衛門 生國同前

大指現しは之を以てし
天正十二年尾列長久と此戦場
を以てし 援敵乃言名を得し

之は後由旗を以てし

元和二年六十一歳にして死す

法若長祐

為春

助右衛門 生國同前

大指現しは之を以てし

尾列鳴海甲列若由子此戦場

付存と川と心

甲府伊豆系狼藉のとき伊豆系

垣者と討捕

天正十年尾列小牧陣の侍を
川とめ長久の此戦場よとの事
名を傳へり

同十四年涉劫氣とかりし菅
沼小大膳一尉に時よ伝列し
とひく下條が家厨と追伐し
そゆふにをひく為春馳じい
て皮黨の勇者をうらとゆ此時

村と赤右衛門 上園一達一ぬ

同十八年小田原陣小毛菅沼が毛
とにありこのとき敵軍酒匂色
しと兵と為去お我て名
を傳へり又志保にりしとひく
敵者頼うらのとき為春敵の能
とくむひとゆ菅沼うれ能をとりて

大指現の高鏡しりう解ふこり
をひく涉劫氣とゆゆうれ

翌年奥列陣小も又

大指現し借手に

交長五年京勝を征しを海軍
わしに

台徳院殿し去るごいをさつり

宇部交よしりそれより又志田

しおめしく江列草津よしり

とをこしり右衣し随侍とけ

取よ賞録をたす

元和えの大阪身陣のとき高木

龍水が総し属して

台徳院殿し借手に陣中つとあ

芳すふよよりし領地をくらひ給ふ

その後内旗をりしり

將軍家しはしりしり

元勝

勘七郎

生國武苑

台徳院殿

將軍家より津之よりまゝり家

重勝しげかつ

源九郎げんくわう

生國冬河なつくにふか

大指現

台徳院殿よりつ之をそまゝり家

長五年園原陣より信守のぶたけ

日十九年元和元年大坂西陣おおいさかにし

よりまゝり家よりまゝり家

將軍家よりつふまゝり家

正忠ただただ

助十郎 生國武院なつくにぶつ

重勝しげかつやいなむら子とに實まことを助たすて

正長ただながが子こや

元和九年

台徳院殿より津つ湯ゆと

寛永元年

將軍家一は之をまひる

政次

劫右衛門

台地院殿

將軍家一は之をまひる

正成

新右衛門

生國冬河

台地院殿

將軍家一は之をまひる

寛永四年大番の組頭と成る

同十六年二条北河原とつとむ

正重

三右衛門

生國冬河

台地院殿一は之をまひる大番

をつとむ河原とつとむ

そはち

將軍家一は之をまひる領地

五石をきゆふ

正真まさまこと

新吉備あらたに

牛國武苑うしくにぶゑん

寛永八年七月

將軍家より流錫りゅうせきと

同十一年より大沙番とつとむ

正近まさちか

五高右史

牛國同前

寛永十三年十月

將軍家より錫せきとそとつた

同年十一月より大沙番と勤つとむ

正時

白馬助しろまのすけ

牛國同前

寛永十六年九月

將軍家より流錫りゅうせきと

同十七年四月より大沙番と勤つとむ

政変

将軍家

寛永十二年より大内政

家紋

三頭のたば

神かみ

● 忠政ちゆうせい

友右衛門尉 尾列那古屋おひらなごやの4子よの
十一じゅういち歳のときより 織田おだ行長ゆきなが
のふ

天正十年十一月てんしゅうじゅうねんじゅういちがつに死しす

忠次

長尾塙尉

江列安云よし

十三歳のときより

東照大指現より

関原陣せきがはらなりびり大坂おさか再度の

陣まよりい信のぶ忠ただ

元和二年

台榭院殿より

月八年

作つくより

將軍家より

寛永七年正月より

忠政

長尾塙尉

城列伏見より

寛永四年

將軍家より

同九年より

家紋

翻フ杖ツ象ゾウ

某 ミヤ

討馬守 つしまのり

牛園伊勢 うしづのいせ

伊勢此玉司了 いせこのたまのしりょう

鴻 つるぎ

某

源次右衛門尉

清名 けい 文林 ぶんりん

秀次より後浪人となる
慶長五年宮原陣の時才元成
伏見の城より櫓籠これ越えよ嫡子
平次と相具しては城よ籠付
朔日一はしとひく我死を

元成

尾平次 牛國月前 法名宗金
秀次よつ久尾列栲田の町守り
をいとむ

東照大権現京都涉辻邊に元成
けしめぐりて河松を儀とえれ
りよりて

大権現より端一をそまのり秀次
薨してのらめり

大権現よりはくそまのり
作しうけをゆりて江列藤生
郡れ涉代宿をつらゆり
園原陣のとき元成伏見の城

籠と穿て先河次右衛門姫河平次
と許すにといひ元成此事を多居
右衛門元忠より告ぐれど元忠是
と許すにといひ元成河次右衛
河平次をこれより河次をいふはし
らとつらして松丸とまじり
八月朔日二人ともいへば城より
といひ討死す

元政

次河次右衛門 生國同前

安文長二年

大権現よりは之をまじり

同五年上松河征伐のとき小山

河次より又関原陣とつとむ其

後河次よりをいひ河次を給ふ

元和二年より

台徳院殿より法久よりつる系

同九年

將軍家よりはふまつ系

寛永十三年八月十日卒十五歳

一と死を

元利

次尾忠右衛門 牛國同前

寛永三年

將軍家よりつる系

同年涉入洛の侍奉とつとむ

同年此冬合縁とつとむ

同四年合縁をくはる縁ふ

同五年大坂の涉り表とつとむ

同十一年合縁とわつとあそく来地と

をうめふ

同十三年九月朔日大坂表の総頭と

なり

同年十一月廿四日元政が遣使領五百石
を賜ふり惣と九百石を領と

某

平次

孝文長五年伏見より父

平次右衛門とあり討死法名浄宗

正成

平次右衛門尉

孝文長五年父平次右衛門伏見より父
討死のとき正成幼少より坊列小
ありこれ正成後伏見より父

同六年

大権現作ありて父平次右衛門先平次

伯父平次が右衛門とありて父
ありによりて正成を母と安よと
て平次を母と安よと

台地院殿

將軍家一傳之書を以て

正次

友尾遠尉

寛永三年

台地院殿

將軍家一傳之書を以て

家紋 緒付扇

乾

● 信忠

源氏盛尉

河列波子村ノ牛倉

畠山次郎ノ所

元龜三年四月六日河列高屋の

城ノ下ニシテ戦死ト時ノ案

六十八 法名浄念

忠清

長右衛門 牛國同前

畠山次郎より流之信三好山城守

笑岸よりいふこと存る長秀者

なりびよ秀頼よりつふ

享文長十五年九月九日八十歳よ

志く死む 法名浄安

忠元

次右衛門 牛國同前

秀者なりびよ秀頼よりつふ

元和元年五月廿五日若れ

東照大権現より錫よりそり

そり

台地院殿

將軍家よりはくそり

元長 もとなが

次郎左衛門尉 生國同前

寛永十五年十二月二日より

將軍家よりつとむるまじり

家紋 二頭のたば ふたごうのたば

派なま

青春せいしゅん 一ひとりりあまるる 活なま間ま

と次

家傳けだん 一ひとりりいいくく 先せん祖そ大だい伴ばん伝でん

氏派うぢなま清せい浦うら関かん東とうよりいいくく 泉いづみ列れつ

野の一ひとりり伝でんとと存ぞんありりありり

派なまとと号ごうとと後こう又またこれこれををわわららるる

三さん脚きゃくとと次じ所しよ謂い派なま別べつはは野の野の是これ

なり活あり一春日大御神自
もれ清親ありいりいりて
これと清親の清揚が母胤清忠
房前れ子とや一なりいり子也
一清次と号し清次後二位よ
叙をばけけ川邊大臣藤原の姓と
なふこれよりて中臣を改
名氏と稱し家一寶劔を傳
清次が子と家清と号し清春一

よりて教世の終をせよ
今按てけけ家傳よ稱し終
とらるこれ中來つまびつらる
とらるつらる人なるけけ
とらる一是もとらるとんも
志げくとも家傳と姓
下一志傳と

● 青春 せいしゅん

後醍醐天皇は清字より忠義あり
けつ派の一字とありしありし派同の
五字とあり

清定 せいテイ

行清 ぎょうせい

武清 ぶせい

清直 せいちく

清良 せいりやう

清勝 せいしょう

兼清 けんせい

國清 くにせい

けつ派同よりけつ
五字とあり

清道

与一右衛門

助清

与右衛門

清成

越後守入道任世

和泉國綾井城

藏田長一 屬を朱印書ふこれ
あり男子五人女子八人一廿
沼伊賀守と稱し清成
か境なり

義清

越後守

綾井城

大坂川に
我死

興清 おきよ

白膳 後井の城

秀吉此とさ奮邑十分一を給

中村式部少将が興力と解

文長五年園原陣のとき忠功と

うげますすべき此旨

東照大権現一と云上はうぶかゆ

中村伯耆守卒一とてのち

忠たれ

大権現一賜一をそつり

台徳院殿一つふまひ

女子

清許 きよきよ

長右衛尉 牛園駿河

文長九年けり

大権現一洋借一と此後

台徳院殿

將軍家

某

東寺寶泉院

某

七ノ患

清貞

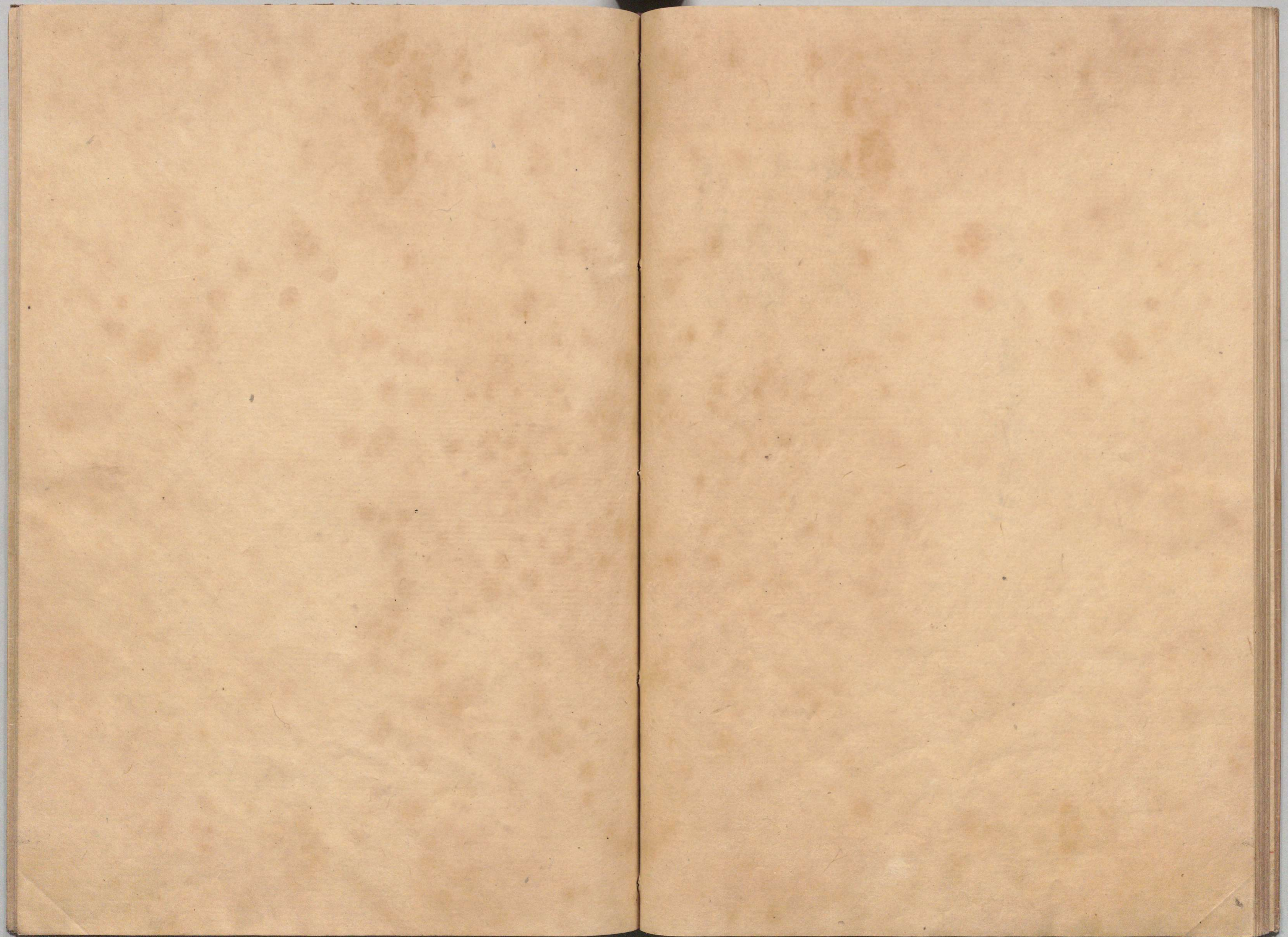
伊織

清村

將監

女子二人

家紋 友三頭瓦巴



勝マカ

●
重信シゲノブ

六郎むろ在あ也や 生國なま冬河ふゆが
先祖せんぞ紀伊きい代しろ清盛よしみ家け了り了り不ふ重信しげのぶ
清康よしみ表へ 廣忠ひろたか卿きみ了り了り不ふ重信しげのぶ

重久 まげひさ

与一郎

生国同前

廣忠郷なまびし

東照大権現はくまのまひれ
冬列上野北城をせめたまふとき
先登北侍八人まき久毛まきこれか
し世れけり鏡下北高名を均
きつと共場りしとひき矢り中

疵を叩く家を連列三方原決合戦
ときまき久涉樂しつきをもちけし
教度涉陣よまきまきひそまき心
操あり七十歳ありて死す

重忠 まげしげ

五た忠

生国同前

天正十八年小田原陣のときめ

まげしげ

大権現より流福より本多地蔵より

厨よりと存

台徳院殿よりつとくまの系

七十二歳よりと死を 江名道表

重定

三右衛門 生國武乾

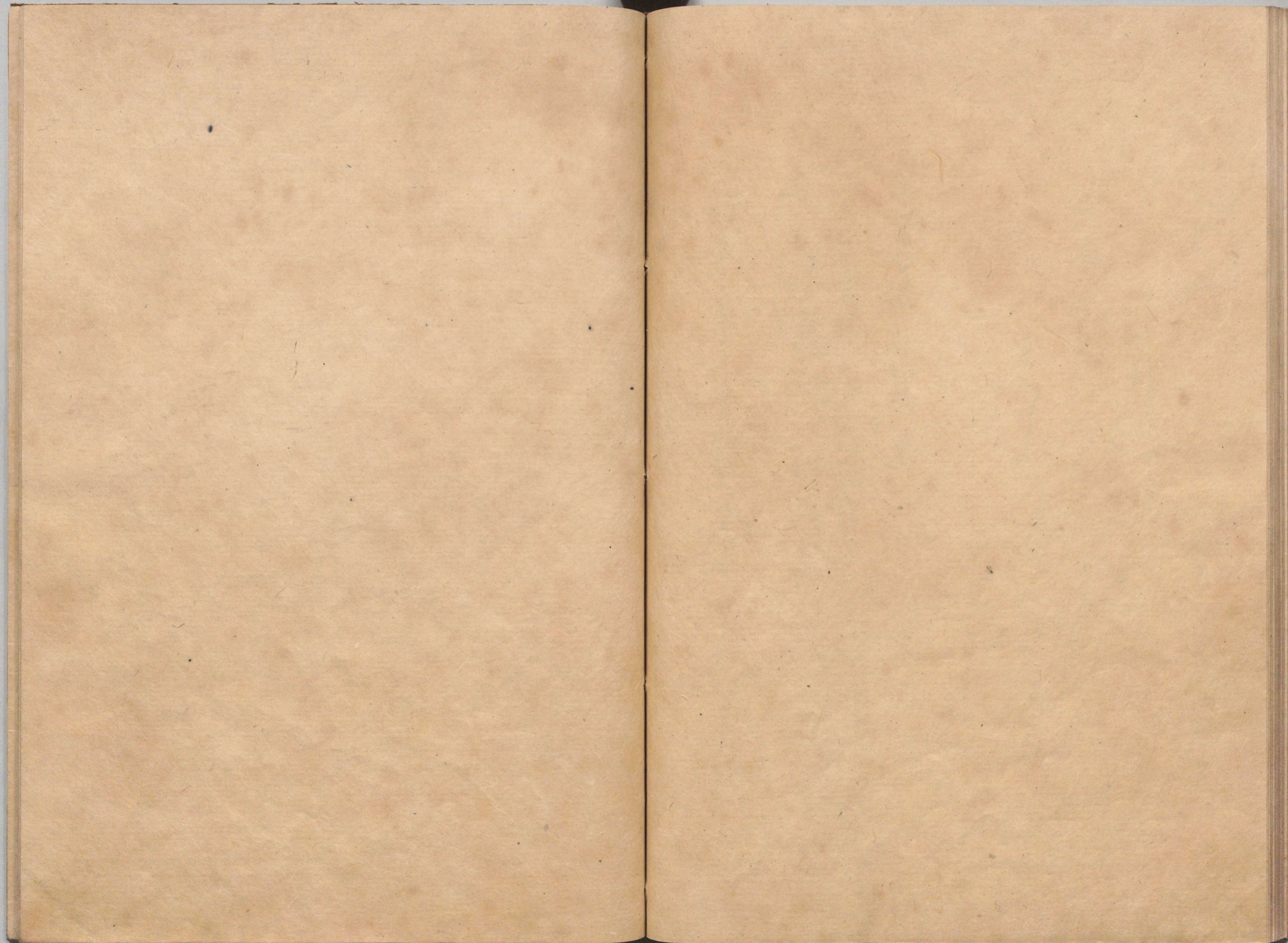
台徳院殿

將軍家より法之よりと存

家紋 茗荷丸

日之り

上二建武三年三月十日... 日二十一... 又三... 記...



澤さわ

● 重次しげつ

惣十郎

生國相さかぐに

小條氏直こじょううぢ 一ひとつふ

丁酉十八年

東照大権現とうしょうだいこんげん 一ひとつふ 一ひとつふ

吾われ後ご

台徳院殿より後之より
寛永三年より死す

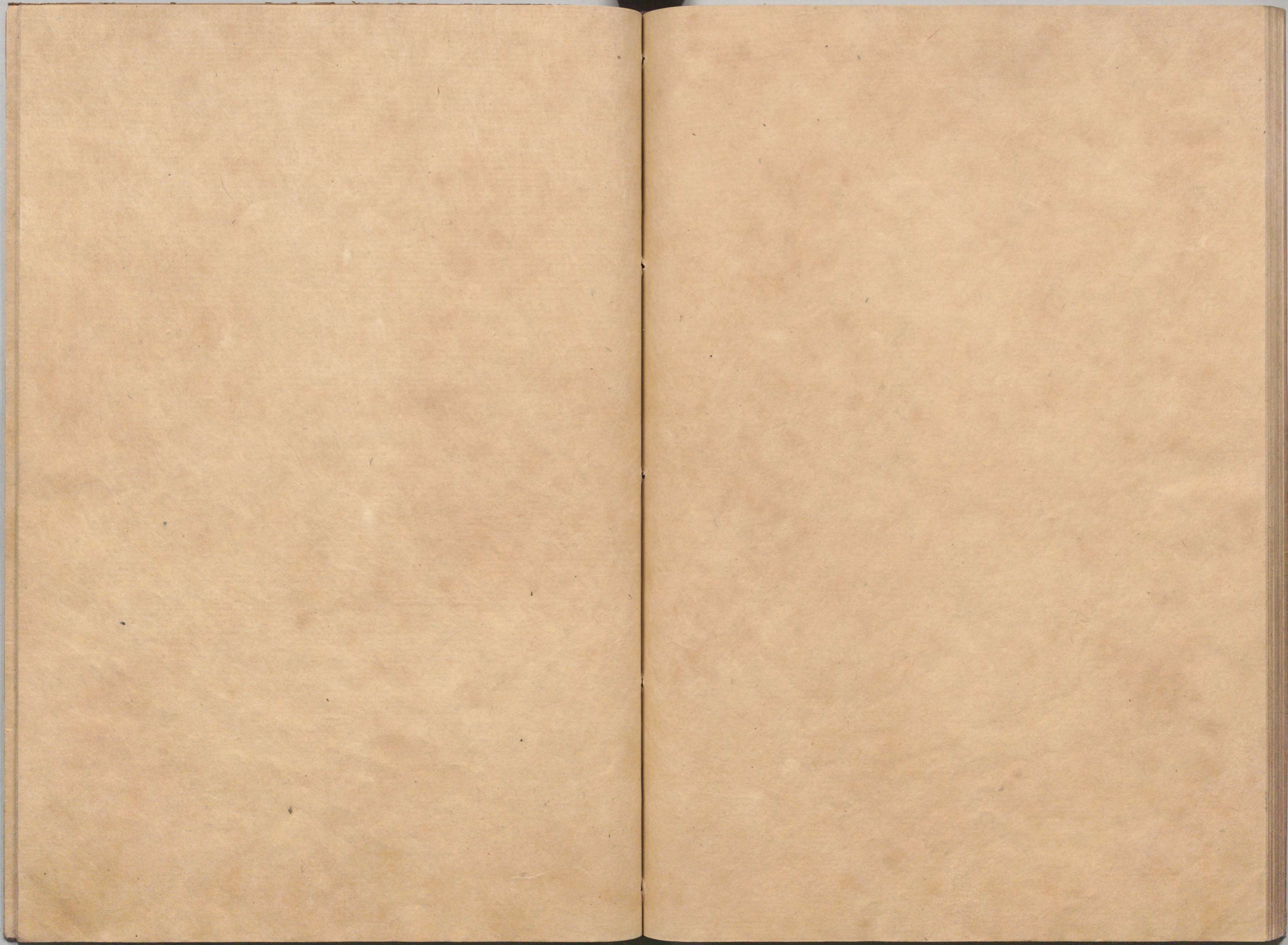
重成 あきら

三田郎 牛園氏 いづみ

元和五年より

台徳院殿より後之より あきら
將軍家よりふまへりる

家紋 丸の内小梅花 あきら



澤さわ

音繩うづな

次郎右衛門

牛國駿河うしくに

東照大権現とうしょうだいこんげんは之をてりつり

涉まは魁けいの役やくをいとし

七十一しちじゅういち歳さい少すくて死しと

法名ほふな普ふ念ねん

吉宗 よしむね

勘七郎 生國日前

大將現了つ之とてつろつろ河小姓と

お家も存大御殿と仰とむ

三十五歳少して死と 法名宗金 むねかね

吉久 よしひさ

勘七郎 生國氏院

台榭院殿了流之とてつろつろ河大侍

毒を仰とむ

二十六歳少して死と 法名宗頼 むねより

吉惟 よしただ

勘十郎 生國日前

吉久や一なるひそ子とて次実と

淺羽孫三郎か子なり十七歳乃

ときより

將軍家より此之を所領の事
は書にいとむ

家紋 丸の内よ二川

後羽家紋 翻

館たね

某なにか

縫ぬい殿い 生ま國くに下した總そう
累かさね代しろ結むす珠たま晴はる朝あさが家け人ひとなり

某

考かん前ぜん 生ま國くに同どう前ぜん

某たが

織部オリ

生國同前

某

傳助

生國同前

將軍家より侍之しやうぐんけより侍しやうり歩あり
の役を以もつとあ又また侍しやう目付めづけと形かたちるそれ
侍しやう志し録ろくのまは頭かぶと形かたちり侍しやう切き米まいと形かたちる

勝重かつしげ

傳九郎

生國氏いこくぢ

將軍家より侍之しやうぐんけより侍しやうり歩あり

家紋
釘くぎ板いた

